

この参道は、かなりの急な下り坂で降りていきますので、よく「行きはよいよい帰りは怖い」と言われてきました。話はそれですが、成田の祇園祭では、山車がこの坂道を勢いよくかけ上っていきます。佐原の祭りをよく知るものとしては、とても考えられません。ここでこの界隈の店舗を少し紹介していきたいと思えます。この区画に入ってすぐにある藤倉商店の店先には、竹細工の小物が多く並んでいます。大根おろし



の細工物は、一度覗いてみる価値は有るかと思えます。さらにこの先には、いくつかの鰻屋が有ります。ざっと川

豊本店、菊屋、近江屋、駿河屋、ひしや、大野屋、鰻福亭(まんぶくてい)等です。何処がおいしいかは好みですので、皆さん自身でご確認ください。この中で川豊本店の店舗は、一度入ってみる価値は有るかと思えます。最後に総門まで降りてくると大野屋旅館の望楼付きの木造三階建ての建物が有りました。なぜ過去形かと言うと、残念ながら、令和4年1月現在解体中です。三階には百十四敷きの能舞台の有る大広間は、一度見ておきたかったと思えました。それでは成田山新勝寺に入っていきたいと思えます。



成田山新勝寺の縁起

成田山新勝寺の建物群を紹介する前に、成田山の歴史を簡単にお話しておきたいと思えます。成田山新勝寺の開創は、平安時代中期に起こった東国の兵乱、平将門の乱(935年～940年)の鎮定をめぐる不動尊の縁起として伝えられているということです。その後18世紀ころより関東における不動信仰の一大中心地として繁栄された

とのこと。また、歌舞伎の初代市川團十郎は子宝に恵まれず成田山に祈願したところ授かることができましたとのことで、それ以来現在の十三代目まで関係が続くことになりました。さらに大正時代に入り、



門前町共々かつて無い繁栄を迎えました。戦後、さらに参拝者は多くなり、更に令和に入った現在では、関東において明治神宮に次ぐ305万人の参拝客を数えるということです。